

H.G.ガダマーと宗教の接点 ―伝記的事実を中心に―

岡田勇督

もくじ

1. はじめに
2. 家族・環境・生い立ち
3. ハイデガーとの出会い——キリスト教神学者から言葉の探求者へ
4. ブルトマンと神学者たちとの交流——情熱的な人文主義者？
5. 晩年期——超越への問い
6. むすび

1. はじめに

本稿で取り扱われるのは、伝記的な側面から見た哲学者ハンス＝ゲオルク・ガダマー (Hans-Georg Gadamer, 1900-2002) と宗教の関係である¹。西洋の思想家たちがキリスト教を中心とした宗教的伝統において生き、思索をしてきた以上、その思想家が宗教に対していかなる関係をもち、それが思想の形成に対していかなる影響を及ぼしたのかを探ることは、思想研究にとって重要な始まりの一步であると言えるであろう。安酸敏眞がレッシングとキリスト教の関係について論じているように、「キリスト教問題をあえて脇に置き、それを問わない仕方でヨーロッパの哲学や思想や文学を論ずるというのが、明治以来のわが国のやり方だった」²のであり、この事態はそれぞれについての個別的な研究によって乗り越えられなければならない。本稿は、ガダマーに関してこれを試みようとするものである。

2. 家族・環境・生い立ち

ガダマーは 1900 年の 2 月にマールブルクで生まれ、1902 年に父のヨハネス・ガダマーが薬学の教授職を得たブレスラウに引っ越し、1919 年に大学へ通うためにマールブルクに戻ってくるまではこのブレスラウにおいて少年時代を過ごしている。このブレスラウ時代に関して言えば、自伝と伝記は宗教に関する記述をめぐって興味深いコントラストをなしている。自伝において、この「ブレスラウの少年時代」はかなり短い章となっているが、ここには宗教に関する事柄がほとんど描かれていない。辛うじて見いだせる思い出も、宗教に対して否定的な印象を与えるものである³。しかし伝記著者のグロンダンは、ガダマーの人生のこの最初の段階から、宗教との接点をいくつかにわたって見出している。

まず、彼の少年時代の舞台となるブレスラウに関して一言しておこう。ブレスラウ

(Breslau. 現ポーランド領ヴロツワフ Wroclaw)は今日では他の大都市ほどに名前を聞く機会はないかもしれないが、ミュンヘンなどが人口を増して大都市になる 1910 年頃まで、ベルリンとハンブルクに続いてドイツ帝国において第三の規模を誇っていた大都市であった(GB.39)。その宗教的状况に関していえば、この都市では宗教改革が比較的早い時期に起こり、一帯のシレジア地方は多数のキリスト教宗派が入り乱れた状況にあったという(ebd.)。当時の宗派別人口はプロテスタントが多数派で 57.2%、カトリックが 37.5%となっているが、これとは別に 4.9%、2 万人ものユダヤ人共同体が同市には存在し、これも当時のドイツ帝国において第三の規模であった(ebd.)。ブレスラウには 1854 年にユダヤ教神学院が設立されており、その充実した図書館と精神活動において、1938 年にナチスによって閉鎖されるまで、ユダヤ教の学術活動の中心であり続けた⁴。ここで思い起こされるのが、戦後になってガダマーにまでもナチス疑惑が及んだ時、もっとも明瞭にその嫌疑に対する反証となったのはカール・レーヴィットなどのユダヤ人との親交であったという事実である(GB.148)。多文化都市ブレスラウの環境がガダマーのユダヤ人との友好関係に直接影響したのかは確かめるすべもないが、このような境遇をバーデンの小さな田舎メスキルヒから出てきたハイデガー、またそのユダヤ人に対する姿勢と対比させることは果たして可能であろうか。

ガダマーの家族に目を向けよう。ハンス＝ゲオルクの父ヨハネスは、ブレスラウ大学やマールブルク大学で教授を務める有能な薬学研究者であった。しかし彼は自然科学的な理性に信頼を置くあまり、人文学を低く見、蔑視する傾向があった。有能な息子が自然科学の道を歩むことを父は期待していたのだが、それに反してハンス＝ゲオルクは芸術や精神科学への傾倒を強めてゆく。自伝に見るように、「文学や演劇、およそ生計のたしにならないものに対する私の愛好には、父は心底から反対だった」(PL.10)のである。

父ヨハネスの人文学嫌いを示す印象的なエピソードがひとつある。彼は 1928 年に 61 歳で亡くなるが、死の床にあっても息子ハンス＝ゲオルクの将来を案じていた。そこでヨハネスは、息子の指導教官でもあり、前年に『存在と時間』を出版して一躍学会の寵児になっていたハイデガーを呼び出すことになる。病室に到着したハイデガーに対して、ヨハネスは息子ハンス＝ゲオルクについての心配を打ち明けるが、ハイデガーは次のようにヨハネスに言い聞かせる。「なぜそんなに心配なさるのです。彼はよくやっていますし、それに関しては私も自信を持っています。あと一年で教授資格を取得できますよ」。しかし、喘ぎながら年老いた父は答えた。「ええ。しかし、あなたは本当にそう思っておいでかな。哲学が人の一生をかけるに値するものだ」と(GB.31)

人文学に対するこのような態度からも、彼の宗教に対する姿勢はおおかた予想されることができだろう。しかし他方で注目すべきことに、母ヨハンナは極めて宗教的で敬虔な人物であったらしい(GB.19)。ヨハンナはハンス＝ゲオルクが 4 歳の時に若くして亡くなったが、彼女の遺品からは宗教絵画、祈祷書、メンデルスゾーンの『ファイドン』などが見つかっており、また敬虔主義の著作であるエルンスト・フォン・フォイヒターズレーベ

ン男爵の『魂の食養法』(*Diätetik der Seele*)には彼女自身の名前が金文字で刻印してあるほどであった(ebd.)。また、ハンス=ゲオルクより二歳年上の兄ウィリは、癲癇にしばしば苦しむ子供であったが、非常に敬虔な性格であった(GB.23)。このように、ガダマー一家の中では父と母兄の間で宗教をめぐるはっきりしたコントラストを描くことができる。

このような家族に囲まれて、当のハンス=ゲオルクの宗教性はどのようなものだったのだろうか。伝記記者のグロンダンによれば、ハンス=ゲオルクはのちになって、彼の宗教的な素質と言えるものは母親から譲り受けたものであるということを語っていたらしい(GB.19)。しかし、彼自身洗礼を受けたプロテスタントであるものの、母から受け継いだ宗教性は素質や傾向性といった程度のものに留まり、最終的に彼自身は自覚的な信仰を持つには至らなかった(GB. 20)。晩年に近いインタビューにおいて死後の生を信じるかどうかについて尋ねられた際、彼はそれを否定し(GB.21)、また別の機会には自らのことを「残念ながら不可知論者である」とした(ebd.)。彼自身の別の言葉がこれを端的に言い表わしている。「つまるところ、私は全く信仰を持っていません。いつも残念に思いながら私はそう言うのです。」(GB.23)。

ハンス=ゲオルクは信仰に対して憧れのようなものを抱き、「神を信じることができたらどんなに素晴らしいかと自分でもしばしば考える」(GB.389)にもかかわらず、信仰への一歩を踏み出すことができなかった。彼はその理由を彼の家庭環境に結びつけて考えている(GB.23)。幼い時期から神のことについて教えられている人間は、信仰を持つことも容易いのであると彼はしばしば繰り返していた(GB.23)。ひょっとすると、ハンス=ゲオルクの不可知論と兄ウィリの敬虔さを分けることになったのは、ウィリが二年間長く過ごすことになった母ヨハンナと共にいる時間であったということもできるだろうか。しかし、このような伝記的な事柄に関しては、あらゆる推論も憶測の域を出ない。敬虔な母親亡きあとに彼を一人前まで育て上げたのは父ヨハンネスであり、宗教的な教育は望むべくもなかったのである。

3. ハイデガーとの出会い——キリスト教神学者から言葉の探求者へ

さて、ガダマーは10代後半からブレスラウを離れ、マールブルク大学での学びを始めることになるが、若くして博士になった彼(22歳)にここで青天の霹靂が訪れる。ガダマーは生涯の師であるハイデガーと出会うことになるのである。この出会いは、一般に『ナトルプ報告』と呼ばれているものを介していることで知られている。1922年、マールブルク大学哲学科の員外教授の席が空いたため、パウル・ナトルプは当時フライブルクにいたハイデガーにこのポストに関する打診を行った。その際、ハイデガーの講義に関する評判はマールブルクに至るまで広く知れ渡っているものの、彼が目立った著作をまだ書きあげていなかったために、他の推薦候補に対して評価が劣る可能性があった。そこでナトルプは、準備中のものでもかまわないから何か書いたものを送ってくれるようにとハイデガーに伝えていた。そこでハイデガーがナトルプに送ってきたものが、序論『解釈学的状況の提示』

と本文の内容の要約を含めた『アリストテレスの現象学的解釈』、通称『ナトルブ報告』である。この報告によって、ハイデガーはハインツ・ハイムゼートやリヒャルト・クローナーなどの大物候補を抑えて、無事にマールブルク大学員外教授として就任することが決定する。

そのころ、博士論文を提出したばかりのガダマーは小児麻痺にかかって苦しみのなかにあった。そこで当時彼の指導教官だったナトルブは、半ば憐れみから、自らのもとの送られてきたハイデガーの原稿をガダマーに与えたのだった(GB.110)。ナトルブとしてはおそらく、すぐにでもこのアリストテレス解釈の完全版が出版されるだろうという見通しのもとでこの原稿を手放したのであろうが、その出版はついに実現しなかった(ebd.)⁵。

さて、ガダマーは『ナトルブ報告』を読んだ当時のことを振り返って、「このテキストは、私にとってそれこそ靈感を含む啓示となった」⁶とまで言い、この時の衝撃を包み隠さず述べている⁷。事実、この出会いはガダマーの人生の転換点であったといっても過言ではない。というのもこの出会いは、マールブルクの新カント学派からフライブルクの現象学へ、というガダマーの思想の動きにおいて決定的な意義を有しているからである。『ナトルブ報告』を読んだガダマーは即座にハイデガーに手紙を書き、病気が治り次第すぐにフライブルクを訪れたいと申し出ることになる(GB.111)。実際に、ガダマーは1923年の夏学期をフライブルク大学において過ごし、ハイデガーやフッサールの演習に参加する。そして、その学期中にハイデガーのマールブルク招聘が正式に通達されることになり、ガダマーはハイデガーと共にマールブルクに帰ってくることになる。このようにして、若き青年ガダマーは唯一無二の哲学の師に出会ったのであった。

それでは、ガダマーはこの『ナトルブ報告』においていったい何を見出したのであろうか。長い間失われ、素性が知られていなかったこのテキストが再発見され、『ディルタイ年鑑』に発表された際、ガダマーは当時すでに89歳の高齢であったが、この小論に対して「ハイデガーの初期「神学」論文」という題で解説を寄せ、次のように語っている。

当時ハイデガーは、まだまったく探求の途上であった。今日この草稿がわれわれにとってもつ意味は、そこにある。彼が探し求めていたのは、キリスト教的な意識についての適切な解釈、またこの意識についての人間学的な理解であった。所詮ハイデガーといえども、われわれ誰しもと同じく啓蒙と科学時代の子であり、われわれ誰しもと同じく彼なりに教会のキリスト教的な教理の伝統との軋轢に悩んでいたのである⁸。

「ハイデガーの初期「神学」論文」という解説の題からも明白であるが、ガダマーはハイデガーの『ナトルブ報告』における宗教的な側面を特に強調する。これに関してガダマーが必ず言及するのが、若きハイデガーが自らを「キリスト教神学者」と呼んでいる、レーヴィットに対する有名な書簡(1921)である⁹。ガダマーを捉えて離さなかった若きハイデガーには、その出自であるキリスト教の刻印が明確に刻まれていたのであった。

この点に関するガダマーの印象は、伝記の中からも多く読み取れる。1923年のフライブルクにおいて、ガダマーはハイデガーとエビングハウスの共同演習に参加してカントの宗教論を読んだ。この件に関しては多くの情報は残されていないが、そこでガダマーは、ハイデガーにおいて「宗教と神学の問題が内なる部分において切迫しているさま」を感じとることができたという(GB.117)。また、同年にガダマーがハイデガーに招かれてトートナウベルクに滞在したとき、二人がともに読んだのはメランヒトンの『神学総覧』(loci communes)であった。ここでも、西洋の神学的思考がハイデガーにとって有している重要性をガダマーは認識することになる(GB.125)。そしてさらに、二人がマールブルクに移ったのち、ガダマーはハイデガーのアシスタントに任命される。その時の彼の最初の仕事は、大学に入っていない演習のテキストを調達することであったが、それはトマス・アクィナスの著作であったという(GB.134ff)。ハイデガーがこの時期行っていた演習の内容は主にフッサール、アリストテレス、そしてスコラ学(特にトマスなど)であり(GB.136f)、彼のカトリックとしての出自やスコトゥスに関する教授資格論文から『ナトルプ報告』を経て、『存在と時間』(1927)に至るまでの1920年代の思索の過程を象徴しているかのようである。

さて、『ナトルプ報告』からおよそ50年後、ハイデガーが亡くなった1976年、彼の追悼式典が行われた際、ガダマーはそこで「存在・精神・神」という名の講演を行っているが、その中で彼は次のように述べている。

〔ハイデガーは〕キリスト教神学者ではなかった。神に関して語ること、それは彼も権能外にあることだと感じていた。しかし神に関して語ることがどういうことでなければならないのかということ、そして学問がその対象について語るような仕方で神について語るのは不適切であるということ、これが彼に思索の道を指し示した問いだったのであった¹⁰。

ガダマーによれば、ハイデガーに対して思索の道を示し続けたものは、神をいかにして語るかという問題であった。そしてこのテーゼを裏付けるかのように、ガダマーはこの講演において、キリスト教的な出自からはじまり、そこから離れて、ヘルダーリンを同伴者として言葉を探し求めにゆくまでのハイデガーの思索を辿ってゆく。この点で、ハイデガーはもはや「キリスト教神学者」ではなく、言葉の探求者となっていたといえることができるであろう。それも、神について語るための言葉を求める探求者であったのだった。

ハイデガーはガダマーの哲学に強く影響を与えた思想家である。そしてガダマーはそのようなハイデガーを宗教的な人物として見なし、この事実は彼に非常に強い印象を与えていた(GB.118)。この事実をどのように解釈するべきであろうか。ハイデガーを介して、ガダマーもその影響を受けていると考えることは可能であろうか。

4. ブルトマンと神学者たちとの交流——情熱的な人文主義者？

さて、ガダマーにとってハイデガーは生涯師であり続けたが、この関係に一大危機が訪れたときがあった。1920年代のマールブルク大学、ガダマーはハイデガーから哲学、特に現象学の手ほどきを受けるのであるが、師の圧倒的な存在感を前にして、ガダマーは自分の才能に疑いをもち始める。ハイデガーもこの不肖の弟子に「現象学の才能が完全に欠けている」(GB.138)と感ずるや否や、彼に手紙を送り、「もし奮い立って自らに厳しく望むのでないなら、自分から出てくるものなんて何ひとつありませんよ」(ebd.)と迫っている。この時、ガダマーは哲学の道を考え直し、1925年(25歳)から古典文献学の訓練を受けるようになったのであった。良くて文献学者になるか、最悪でも学校のギリシャ語教師になれば、というのが彼の控えめにも過ぎる望みであった。

さて、この時期のガダマーを学問的な危機から救った人物が幾人かいる。その一人がルドルフ・ブルトマンであった。ブルトマンは20世紀を代表する聖書学者・神学者の一人として有名であるが、ガダマーにとっての彼は「単に鋭い神学者であつたばかりでなく、情熱的な人文主義者」であつた(PL.37)。「ギリシャの古典作家から普遍的文化を獲得するよう努力する」(GB.141)ブルトマンの姿を、ガダマーは目の当たりにしたのである。特に有名なのは、ブルトマンが主催していた「グレーカ」と呼ばれるギリシャ古典の読書会であった。

この会は木曜日ごとに、私の思い違いでなければ、ブルトマンの自宅で開かれた。[...中略...] それは専門的な研究会ではなかった。一人が不運にもドイツ語訳を読み上げる役を命じられ、他の者はギリシャ語の原文でそれについて行くのであった。このやり方で、われわれは何千ページも読んだ。時には討論に発展し、より広い展望が得られた。しかしブルトマンは何度も座を引き締めて読書を続行させた。悲劇と喜劇、教父とホメロス、歴史家と雄弁家——そのいかに問わず古典の全世界を、われわれは十五年にわたる毎週一夜の会で駆けめぐった。(PL.38)

15年もの間同じ読書会に参加し続けるというのはなかなか稀有な体験ということができるであろう。この継続を通して、文献学者にして古代哲学の研究者としての地力をガダマーが蓄えたことは想像に難くない。また、この読書会は世紀の神学者ブルトマンに指導されていただけでなく、ゲルハルト・クリューガーやギュンター・ボルンカムなど、後にキリスト教研究の分野で業績を挙げる若手がこの会の参加者に名を連ねている(PL.38)。この時に結ばれた交友関係は後々にまで続いてゆくものであった。例えばボルンカムに関して言えば、ガダマーは戦後にハイデルベルク大学に移った際、彼と再会を果たすことになる。ガダマーの証言によれば、慣れないハイデルベルクの地で生活に溶け込むために助けとなったのは、ボルンカムやフォン・ラートら神学部と同僚であつたという(PL.168)。いずれにせよ、ガダマーが自らの学問的な才能に関して深い疑いを抱いていたとき、またハイデガーに見放されていた時期にあつて、彼を勇気づけ励ましたのは、ブルトマンらのグループ

の存在であった(GB.120)。

また、ガダマーがブルトマンから決定的な影響を受けた機会がもう一つある。ガダマーがハイデルベルクに移った 1950 年の頃、彼は今まで続けてきた「芸術と歴史」に関する講義を一つの本にまとめあげる計画を抱いていた(PL.171)。この計画がおよそ 10 年後、彼の主著である『真理と方法』(1960)に結実するのであるが、その頃折しもブルトマンは「解釈学の問題」(1950)という論文を著し、自分が火をつけた聖書の非神話論化問題についての原理的な解明を推し進めていた。巻田悦郎によれば、ガダマーはこの「解釈学の問題」の論文抜刷を持っていたらしく、「芸術と歴史に関する講義」が最終的に「解釈学」という形でまとめ上がったことに関してはブルトマンやその弟子たちの影響が推測されるという¹¹。このことを証左するのが、『真理と方法』のタイトル決定に関する一連の経緯である(GB.320)。この本には「哲学的解釈学の要綱」という副題が付けられているが、これはもともとメインタイトルになるはずのものであった。しかし、出版社であるモーア・ジーベック書店(J.C.B. Mohr(Paul Siebeck))はこれに難色を示す。解釈学(Hermeneutik)という語が人口に膾炙していない当時の状況で、このようなタイトルは理解されないのではないかというのがその危惧の理由であった。それに代わるものとしてガダマーが提出したのが、「理解と出来事」(Verstehen und Geschehen)であったという。これはブルトマンの神学論文集『信仰と理解』(Glauben und Verstehen)を容易に思い起こさせるものだろう。結果として、20 世紀後半の哲学に「解釈学」の語を復権させる大著は『真理と方法』という題になったものの、この経緯はガダマーに対するブルトマンの影響力を間接的に感じさせるものといえる。これらの点から、ブルトマンだけでなく、神学という学問領域がガダマーの思想形成に及ぼした影響は多大なものがあったといえることができるであろう。

さて、ブルトマンやその弟子たちの多くはプロテスタントであるが、ガダマーには後になってカトリックとも関わることになったことも興味深い。1968 年にハイデルベルク大学を退官したのち、ガダマーはアメリカやイタリアなど多くの国で講演や講義をして回るようになるが、その際の拠点の中にはアメリカ・カトリック大学(Catholic University of America)やボストン・カレッジ(Boston College)など、カトリックの背景をもつ大学があった。その理由としては、〈古典性〉や〈伝統〉などの概念に見られるように、古典的な人文主義と親和性の高い哲学的解釈学が評価されたということも考えられるであろうが、伝記記者のグロンダンはアメリカの思想界における状況からの推測を行っている。分析哲学の色の濃いアメリカの思想界では、トミズムの地盤であるプラトン・アリストテレスなどの古代哲学が研究される拠点として、このような宗教的な背景を持った大学が機能していたのである(GB.363)。

また、グロンダンの伝記にはガダマーと当時の教皇ヨハネ・パウロ二世の関わりも記録されている。1983 年、ローマ近郊のカステルガンドルフォにてガダマーが「二つの世界の市民」(Bürger Zweier Welten)¹²という題の講演を行った際、会見に臨席していた教皇は謝意を示し、「摂理によって、ガダマー教授と握手を交わすという荣誉すら許されました」

(GB.365)と述べている。また、ガダマーが亡くなった2002年3月、彼は「気高き人文主義者」であるガダマーに電報を送っている。その中で教皇はガダマーの「真理を求めるその誠実さ、思考の鋭さ、対話相手への心ある敬意とキリスト教的人文主義の価値の尊重」について言及している(GB.392)¹³。これらのことの帰結として、カトリックの側でもガダマーの思想を評価する動きがあることは興味深い事実であろう¹⁴。

5. 晩年期——超越への問い

さて『真理と方法』を出版し、ハイデルベルク大学を退官して後もガダマーは著作活動が続けるのであるが、さらにその後の晩年期において、彼は対話などでしばしば〈超越〉(Transzendenz)という概念を問題にし始める¹⁵。彼はこの概念について直接定義しているわけではないが、超越とはある種の限界概念であって、有限な存在者である人間の及ぶ範囲を超えたところにあるもの、もしくはそれが存在するという感覚、という形式的な規定が与えられることになるであろう。ガダマーの曖昧な例示をあえて引けば、「誕生、生、死などの神秘については、我々が語ることができないものがたくさんある」¹⁶のであって、このようなものに対して人間は「我々は知らない」(Ignoramus)¹⁷という態度を貫かなければならない。このイグノラムスがある意味、人間存在の有限性についての信仰告白をなしており、これに対応する形でそれを〈超えるもの〉として超越概念が規定されるのである。

もちろん、ここで語られている超越は何らかの実定宗教における神ではない。むしろこの超越は、〈単なる理性の限界外にあるもの〉としてもっとも形式的に、また無内容に規定された哲学者の神である。そして、これに対する形で教条主義的(dogmatic)な宗教信仰が存在している。上のように形式的な超越の概念規定からすこしでも外れて、より明確で具体的な規定をそこに加えると、それはすぐさま教条主義に陥ってしまい、超越概念の有している真の普遍性が失われてしまう¹⁸。むしろ、あらゆる宗教は「超越に対する開かれ」¹⁹という共通の核を有しており、この点に関して諸宗教は合意に至ることができるとガダマーは論ずるのである。そしてツィーマーマンによると、ガダマーはこのような超越概念が世界的な宗教間対話を可能にするのではないかと考えているという²⁰。

ガダマーによれば、このような宗教間対話は切実に要求されている。というのも、倫理的問題、社会的不平等、宗教原理主義の台頭などの絶望的な状況にあって、問題を解決する可能性を残しているのは諸宗教の団結・協力という道しか存在しておらず²¹、人類の運命はこの宗教間の対話にかかっているからである²²。ガダマーはドットーリとのインタビューにおいて次のように述べている。

ヨーロッパ的な思惟において私たちが有している超越への切望、これが密かにであっても至る所に存在しているということを見てとらなければなりません。[...] もし四大世界宗教が超越を偉大な未知なるものとして認めることに一致すれば、ガスだとか化学物質だとかによって地表を台無しにしてしまうのを防ぐことができるかもし

れない。方策としてはただこれがあるのみです。他にはどうしようもない。私たちは世界宗教との対話に入らなければいけないのです。ひょっとすると十分な時間があるかもしれないし、あるいはそうでないかもしれない。そのことについて私は知りません²³。

ドットーリとの対話は 1999-2000 年に行われたものであるが、この後 2001 年の 9 月には 9.11 同時多発テロ事件がアメリカで起こっており、老齡のガダマーですらも新聞にインタビューを求められた。ガダマーはアラブ・イスラームという巨大な他者を目の前に茫然と立ち尽くしつつ、それでもなお人類の活路を見いだすために別のインタビューにおいて〈希望〉について語っている(GB.389)。そしてこれに引き続いてツィーマンがガダマーとの対話を行ったのは 2002 年の初頭、ガダマーが亡くなるわずか一か月前である。このような世界情勢を前にして、ガダマーが希望を見出した先が諸宗教の対話であったというのは、理解しがたいことではない。この概念はガダマーが生きた時代状況を指し示すものとして注目されるものである。

6. むすび

本稿では、宗教との関係という問題設定のもとに、100 年を超えるガダマーの生涯を大急ぎで駆け抜けた。ここで得られた多様なイメージから統一的な結論を導き出すのは難しいが、ガダマー研究の予備作業としての意義はある程度果たし得たのではないと思われる。ここで見出した興味深い事実からガダマーの思想を逆照射してみるもよし、ここに登場した別の思想家との関連を探ってみることもできる。いずれにしても、このようなコンテキスト研究は解釈学的循環によって思想研究と媒介させられなければならない、本稿はそのための第一歩に過ぎないことを自覚するべきであろう。

¹ 本稿において主に使用される資料は三種類ある。まずガダマー自身による自伝『哲学修業時代』(以下 PL)、次にガダマーの高弟ジャン・グロンダンによる伝記(以下 GB)、そしてガダマーが晩年さまざまな人物と行ったいくつかの対話篇である(それゆえ、本稿は新しい資料をもとに新しい事実を発見することを目的としたものではない)。

PL: Hans-Georg Gadamer, *Philosophische Lehrjahre*, Vittorio Klostermann GmbH, Frankfurt am Main, 3. Auflage, 2012(1977). (ハンス=ゲオルク・ガーダマー(著)、中村志朗(訳)、『哲学修業時代』、未來社、1996. なお訳が優れているため、邦訳をそのまま引用する)

GB: Jean Grondin, *Hans-Georg Gadamer: Eine Biographie*, Mohr Siebeck, Tübingen, 2. Auflage, 2013. (1999) (*Hans-Georg Gadamer: A Biography*, (Translated by Joel Weinsheimer) Yale University Press, New Haven and London, 2003)

グロンダンの伝記に関しては、若干立ち入った説明が必要であろう。もとのドイツ語第一版は 1999 年、つまりガダマーの存命中に出版された。その経緯に関しては 2013 年に出版されたドイツ語の第二版序文に詳しい。グロンダンがこの伝記を構想した 1980 年代の末ごろには、ヴィクトール・ファリアスによる『ハイデガーとナチズム』が刊行され、ハイデガーに対するナチズム嫌疑がガダマーにまで飛び火しようかという状況にあった。そのようななかでグロンダンはこの伝記において、ガダマーの政治的過去とナチ時代における彼の著作について研究することを試みたのであった。ガダマーが 2002 年に亡くなったのち、

2003年にこの伝記の英語版翻訳が出版された。ここでは新しく、ガダマーの100歳記念祭(2000年)や、彼の葬儀(2002年)などを描いたエピローグが新しく付加されている。そして、2013年に刊行されたドイツ語第二版は、このエピローグを含めて加筆修正が改めて施されており、決定版というにふさわしいものである。

² 安酸敏眞、「レッシングのキリスト教—伝記的考察—」、『基督教学研究』(京都大学基督教学会編)、vol.33, 2013, 170頁。

³ 例えば、学校教育の場における彼の次のような回想を参照。

「そのほか、自分で考えてみようという気になった不可解な物事にも初めて遭遇した。たとえば、宗教は恐怖から生じたか否かをめぐって、二人の教師に意見の対立があった。そうだと主張する頑固な啓蒙主義者の勇ましきの方が、いくぶん坊主くさいその相手方より私には立派に思われた。」(PL.9)

⁴ Bernhard Brilling, 'Breslau', *Encyclopedia Judaica*, Vol.4, Keter Publishing House, Jerusalem, 1972, p.1356

⁵ ナトルプ報告成立の詳細に関しては、以下の文献に収録されている高田珠樹の論文に詳しい経緯の説明がある。またガダマーの「ハイデガーの初期「神学」論文」に関しては、高田による訳をそのまま引用した。

ハイデガー(著)、高田珠樹(訳)、『アリストテレスの現象学的解釈『存在と時間』への道』、平凡社、2008年

⁶ Ibid., 111.

⁷ ただしこのようなテキスト上の出会いに反して、二人の実際の初めての出会いは、ガダマーにとってはいくぶんがっかりさせられるものであったらしい。ガダマーがはじめてハイデガーのオフィスを訪れたとき、中からの話し声を聞いたので、ガダマーは部屋の外で待っていた。そして一人が部屋から出てきたが、部屋の中にはまだ小柄な男が一人残っているようだった。まだ別の人がハイデガーと喋っていると思ったガダマーは部屋の外で待ち続けたが、もはや話し声は聞こえない。意を決してドアをノックしてみると、なんとこの小さな男は、あの『ナトルプ報告』のハイデガー本人であった(GB.116)。ガダマーは自分のなかで、偉「大」なハイデガーのイメージを作り上げていたのである。Vgl. Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke Band.10: Hermeneutik im Rückblick*, J.C.B. Mohr(Paul Siebeck), Tübingen, 1995, S.4

⁸ Ibid., 109-110.

⁹ Dietrich Papenfuß und Otto Pöggeler(hrsg.), „Drei Briefe Martin Heideggers an Karl Löwith“, *Zur philosophischen Aktualität Heidegger*, vol.2, Vittorio Klostermann Frankfurt am Main, 1990, S.29.

¹⁰ Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke 3: Neuere Philosophie Hegel Husserl Heidegger*, Tübingen: J.C.B. Mohr(Paul Siebeck) 1993, S.321.

¹¹ 卷田悦郎、「哲学的解釈学と神学的解釈学——ガダマーとブルトマン学派——」、『東京理科大学紀要(教養編)』、vol.26、1994、261-274頁。

¹² Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke Band.10: Hermeneutik im Rückblick*, J.C.B. Mohr(Paul Siebeck), Tübingen, 1995, S.225-237

なお、この時の会見にはエマニュエル・レヴィナス、ポール・リクール、チャールズ・テイラー、また日本ではあまり知られていないが、カトリックの倫理学者であるロベルト・シュペーマンなど錚々たるメンバーが参列している。以下のレヴィナスの伝記も参照。

Marie-Anne Lescourret, *Emmanuel Levinas*, Flammarion, Paris, 1994, p.297ff.

¹³ グロンダンの伝記には„Rhein-Neckar-Zeitung, 19. März 2002”という典拠があるが、これは確認することができなかった。ただし、他の情報からも確認できる事柄であり、信頼に値すると思われる。例えば、次のサイトを参照(2016年3月1日アクセス)。

<https://zenit.org/articles/philosopher-hans-georg-gadamer-s-death-saddens-john-paul-ii/>

¹⁴ この点に関しては、サルマンの叙述を参照。Wasim Salman, *Gadamer e I teologi: Intorno alla teoria della storia degli effetti(Wirkungsgeschichte)*, Urbaniana University Press, Città

del Vaticano, 2012, pp.115-127.

¹⁵ この概念は、管見の限りリカルド・ドットーリとの対話においてその輪郭を見せ、イエンス・ツィーマーマンとの対話やそれについての論文などにおいてある程度明瞭化されることになった。

リカルド・ドットーリとの対話は、

Hans-Georg Gadamer und Ricardo Dottori, *Die Lektion des Jahrhunderts: Ein philosophischer Dialog mit Ricardo Dottori*, LIT Verlag, Münster, Hamburg, London, 2000.

イエンス・ツィーマーマンとの対話は、

Jens Zimmerman, 'Ignoramus: Gadamer's "Religious Turn"', Andrzej Wierciński(ed.) *Gadamer's Hermeneutics and the Art of Conversation*, LIT Verlag, Berlin, 2011, pp.309-322. (originally appeared in *Symposium: Journal for Hermeneutics and Postmodern Thought* vol. 6, 2002, pp.204-17.)

ただし後者に関して言えば、これは対話そのものの記録ではなく、著者のツィーマーマンがガダマーと行った対話をもとにして著述した論文となっている。対話記録自体は出版されておらず、それ故この論文の信頼度は、思想の分析のための資料としてはかなり難があると言わざるを得ない。だが、そもそも利用できる資料自体が少ないという事情も加味して、あえてこの論文を取りあげることにした。なお、発表者はツィーマーマンが論文作成のために作った対話記録を、シアトル大学のガダマー研究者であるジェイムズ・リッサー教授を経由して入手している。

¹⁶ *Die Lektion des Jahrhunderts: Ein philosophischer Dialog mit Ricardo Dottori*, LIT Verlag, Münster, Hamburg, London, 2000, S.81.

¹⁷ Jens Zimmerman, Ignoramus: Gadamer's "Religious Turn", Andrzej Wierciński(ed.) *Gadamer's Hermeneutics and the Art of Conversation*, LIT Verlag, Berlin, 2011, p.315

¹⁸ Ibid., 321

¹⁹ Ibid., 314.

²⁰ Ibid., 316. これは、自らの教義にしがみついている実定宗教が自らの知の限界を自覚し、自らが見ていない真理を他の宗教が見ている可能性を認めることで、諸宗教は互いの存在を認めることができるということであろう。

²¹ Ibid., 312.

²² Ibid., 313.

²³ Gadamer und Dottori, S.139.